

氏名	しろた ちか 城田 愛
学位(専攻分野)	博士 (人間・環境学)
学位記番号	人博第 345 号
学位授与の日付	平成 18 年 11 月 24 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
研究科・専攻	人間・環境学研究科文化・地域環境学専攻
学位論文題目	エイサーにみるオキナワンたちのアイデンティティ ——ハワイ沖縄系移民における「つながり」の創出——
論文調査委員	(主査) 教授 福井勝義 教授 山田孝子 教授 田中雅一

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、1900年以降、沖縄からハワイへ移民した人びととその子孫たちが、どのようにアイデンティティや「つながり」を創りだしてきたのかを文化人類学的に論じたものである。具体的には、ハワイで100年近くおこなわれてきたエイサー（オキナワン・ボン・ダンス）という旧盆の集団舞踊をいくつもの事例をもとに考察している。移民一世とその末裔たちは、沖縄と日本、ハワイ、そしてアメリカにまたがる近現代史の流れのなか、家庭を築き、血縁・地縁関係を強めながらコミュニティを形成してきた。今日、ハワイに約5万人いるとされる沖縄系移民たちは、日系とは別の「オキナワン」という意識を、エイサーを踊ることをとおして示している。

序章では、申請者自身が沖縄系移住者の「末裔」であるという位置づけを、文化人類学と沖縄研究における移住に関する議論に関連づけながら明らかにしている。ここでは、沖縄から大阪へ移り住んだ申請者の祖父とのコミュニケーションのギャップやハワイへ移民した親族の話織りまぜながら、日本本土や沖縄等で「なにじん」であるかを意識してきた「沖縄系三世」としてのユニークな体験が記されている。そして、現代における人と文化の移動にともなうアイデンティティに関する、文化人類学のみならず普遍的な、この問いかけをもつにいたった経緯を独自の経験と言葉でもって述べている。

第1章では、理論的枠組を提示し、ハワイの沖縄系移民の先行研究に関するレビューをおこなっている。最初に、日系移民に関する文化人類学的研究についてとりあげ、次にハワイ社会におけるアイデンティティに関する議論を整理している。ここでは、先住民と移民の子孫たちが居住するハワイにおける多文化的な状況を強調する「マルチ・エスニック肯定派」、そしてハワイのエスニシティはアメリカによって組み込まれ、プランテーション経済やその後の観光業等の欧米の資本主義によってつくられたとする「マルチ・エスニック批判派」とに大別している。そして、これらの議論をふまえ、本研究を「クロス・エスニック着眼派」として位置づけ、「ミグリチユード人類学」という新たな視座を提唱している。

第2章では、まずハワイの歴史的、社会的な状況を考慮しながら日系移民社会を概観し、ハワイにおける沖縄系移民たちの集団形成とアイデンティティの変遷過程を分析している。つづいて、移民史を補足するため、沖縄、日本本土、ハワイ、北米、南米に点在する申請者の親族である沖縄系移住者と末裔の親族の合計約525名からなる系譜をとりあげている。そのなかで、ハワイ式、アメリカ式等に変化してきた位牌や名前の継承、墓の建立方法、結婚相手の変容過程の事例をもとに、「もの」や実践面から移住者たちの「つながり」の重層的なありようを具体的に浮き彫りにしている。

第3章では、移民初期に「琉球（沖縄）盆踊り」とよばれていたエイサーが、第二次世界大戦後、「オキナワン・ボン・ダンス（Okinawan bon dance）」、「エイサー（eisaa）」とよばれ、ハワイ独自の意味づけをおびながら変容してきた過程をとりあげている。ここでは、踊りの実践から、ハワイの沖縄系移民史をとらえなおしている。そうして、踊りを介して編成される沖縄系移民の集団化のプロセスを通時的、巨視的に分析している。

第4章では、1995年以降おこなってきた計3年以上におよぶフィールドワークから得た豊富なデータをもとに、エイサーの現代的展開について考察している。ここでは、踊り手たちを対象に行ったアンケートおよびインタビュー調査、そして踊

りへの参与観察から入手した資料を丹念に分析している。

第5章においては、戦前からの移民だけではなく、戦後、米軍基地関係者との婚姻等を機にハワイへ移住してきた沖縄女性の踊り手たちと、その家族および複数のエスニック背景をもつオキナワンの踊り手たちをとりあげている。とくに、先住ハワイアン系等を含む非沖縄系の踊り手たちの移民誌（生活誌）を記述することによって、マルチ・エスニック化するハワイ社会における人びとの多様なむすびつきの実態を描いている。

終章では、結論および今後の課題と展望について論じている。ハワイのマルチ・エスニック的な状況においては、沖縄系移民たちのアイデンティティや「つながり」を、固定的なエスニシティの議論だけでとらえることはできなくなってきた。そこで本論文では、エスニシティの交叉的状況に着目するという視点を提示している。ハワイ化されたエイサーは、他のエスニシティとその文化的要素がまじりあう際の接点となりうるものである。そこでは、既存の人びとの分類をこえていくような動的な「つながり」が生みだされている。踊りの現場では、それぞれの帰属意識や集団性が再認識され、強調されている。同時に、踊りの実践は、集団や属性を規定する枠組みを超えていくようなシステムになっている点を指摘している。

これらのことから、本論文では、従来の移民のエスニシティ論にかわりうるものとして、移住者たちの主体的な営みを表す「ミグリチュード」という概念を提唱している。ハワイのエイサーは、沖縄系の人びとの自己と集団の意識を強化しながら、非沖縄系の人びとや米軍基地関係者等も取り込んでいくとともに、出身地沖縄や他の移住先における沖縄系の人びとも呼応しながら、新たな「つながり」を生みだしている。このような踊りの場は、複数の文化が出会い、社会関係と文化が編みだされていく現場でもある。

課題と展望としては、本論文においては踊りという無形文化に重点を置いて論じているため、移民たちの文化センター（県人会館）や、移住をとりあげたミグリチュード・ミュージアム等における有形文化（物質文化）に関する調査および研究を深めていくことをあげている。さらに、移住者の末裔であるオキナワンたちが、どのように先住ハワイアンたちの権利を主張していく運動等に関わっていくのかを詳しくみていくことも課題としている。

以上、本論文では、ハワイ化されたエイサーの実践例をとおして、沖縄系移民の人たちを今日のマルチ・エスニック社会であるハワイ、そしてグローバル化がすすむ現代社会に位置づけ、さまざまな交渉からはぐくまれてきた社会関係と可変的アイデンティティのありかたを詳細な事例をもとに明らかにしている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、グローバル化が進行する現代社会における、人と文化の移動に伴うアイデンティティの生成を論じたものである。その意義は、ハワイにおける沖縄系移民の集団舞踊を介して創出される「つながり」に関する実証的な調査研究から、人びとの集団編成と新たな文化創造に対して、独創的かつ斬新な文化人類学的な知見を提示したことにある。

本論文における積極的な評価としては、以下の3点があげられる。

第一に、本論文は、まずハワイ沖縄系移民のおかれた沖縄と日本およびハワイを含むアメリカとの社会的・政治的背景をもとに、移民たちによる主体的なアイデンティティの表出と舞踊文化を創り出してきた過程を綿密に分析している。エスニシティの実践的側面を如実に浮き彫りにしている。いくつもの事例をもとに、集団が編みだされ、文化がはぐくまれる過程を具体的に示した本論文は高く評価される。

第二に、移動が地球規模ですすんでいる文化的な生成過程における現時点の観察を、微細的かつ巨視的な視点をもっておこなった点に特徴がある。これは、近年の文化人類学における重要な課題である、人と文化の移動に関する動的な研究を目指すものである。とりわけ、従来の人類学が前提にしてきた調査対象となる文化、領土、人びとの「三位一体説」を批判し、「ミグリチュード（移住・移民の特性）」という独自の概念を提唱し、文化人類学における移民やエスニシティに関する議論に新たな展開をもたらそうと挑んだ点は着目される。

本論文では、「民俗舞踊」が移民とともに新たな土地にわたり、「民族舞踊」となる過程を考察している。従来、旧盆の際、祖先供養の一環として舞われていたエイサーが、ハワイの沖縄系移民たちのルーツ探しや、文化的・社会的な居場所を確認する作業と強く結びつきながらも、先住ハワイアンや米軍基地関係者を含む沖縄系以外の新たな担い手、社会関係、そして

踊りの演出スタイルを獲得しながら展開していることを明らかにしている。

これらの分析結果から、さまざまな移民と彼らの子孫たちによって構成されるハワイ社会の人びとをめぐってエスニシティが複雑に交叉している点を指摘し、移民たちのエスニシティ論に「ミグリチュード」という新たな概念を提示した。この概念が、ハワイ以外の北米や南米への沖縄移民や沖縄系以外の移住者たちに、どれだけ応用していくことができるのか。オキナワン・ミグリチュードは、その特殊性と普遍性に関する議論の今後のさらなる展開に期待が寄せられる重要な論点といえる。

第三に、申請者自身が沖縄系移住者の子孫であるということ、および実際にエイサーの踊り手であるという利点をいかし、調査対象との強い絆をえながら研究をおこなった点において独創性がある、といえる。つまり、人類学において問題視されてきた「調査する側とされる側」との関係性は容易に二分できるものではなく、さまざまな要素が絡み合っていることを申請者は自らの体験をもとに実践的に示そうとしている。

本論文でとりあげた舞踊集団の担い手たちの出身地および居住地は、沖縄からハワイや他の移住先さらには米軍基地にまたがって、踊り手たちのエスニックな背景は多様化している。しかし、このように人と文化が激しく移動し変動する現代にわたる集団をどの単位でみていくのか。血縁と地縁を基礎にした従来との関係性に、新たな特徴を加味しながら拡大していく「つながり」に関する、より多くの実証的データが今後の課題である。

なお、申請者は、1995年から2005年までの間、合計3年以上の現地滞在をへて、対象社会や対象者への関与から、信頼関係と深い理解を得ながら多くのデータを収集してきた。研究成果の一部は、既に日本のハワイ研究ならびにオキナワン・ディアスポラに関する英語論集等に掲載され、国内外から高い評価を得ている。

申請者は、本論文をまとめるにあたり、つぎの研究助成をうけている。The Crown Prince Akihito Scholarship（皇太子奨学金、1997年～1999年）、トヨタ財団助成金 A（2000年～2001年）、科学研究費補助金（特別研究員奨励費、2003年～2006年）、および武蔵大学総合研究所オープン・リサーチ・センタープロジェクト「グローバル化による各国・各地域の経済、社会、文化変容の実態と影響に関する国際比較研究」における「社会班」（代表：白水繁彦武蔵大学社会学部教授、2003年～現在に至る）、そしてサントリー文化財団「人文科学、社会科学に関する研究助成」における研究課題「アメリカ合衆国における東アジア系移民の連帯と葛藤：多元的共生の観点から」（研究代表者：朝倉敏夫国立民族学博物館教授、2003年～2004年）の共同研究である。これら5件の研究助成を得ていることは、本研究の課題と成果が十分に認められていることを裏付けている、といえよう。

以上のように、本論文は、地球規模に展開する人びとの移住とそのプロセスから創出される文化およびアイデンティティに関する研究課題を、集団舞踊の事例分析から独創的な論考としてまとめられており、本研究科文化・地域環境学専攻文化人類学講座にふさわしい内容を備えた優れた研究成果として判断される。

よって本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成18年7月6日、論文内容とそれに関連した事項について試問をおこなった結果、合格と認めた。